

本興寺だより

令和五年
十月
第二五〇号

「我（仏）は智慧の力をもって、衆生の性質や我欲を知って、それぞれに応じた方便を用いて教えを説き、皆歡喜することを得らしめる」

（法華經 方便品第二）

中秋の名月（九月二十九日）を過ぎ、爽秋から、秋冷へと季節が進んでいきます。昔は中秋の名月には、月見団子を供えて作物の収穫に感謝しました。ススキを飾り、災いから収穫物を守り、翌年の豊作を願う気持ちを込めたものです。

大自然には、動物、植物（野菜果物等）人の命を支えてくれる沢山の命の営みがあります。皆、規則正しいそれぞれの命の法則により、成長し、花を咲かせ、実をつけ、命が尽きれば、次の生への種子を残して散っていきます。

人の命も同様です。生き方の道があるのだと云われます。樹木や草花、果実のように、その成長と実りの鍵は目に見えぬ根が握っています。

人の生き方も、その盛衰は表面的な行動よりも、見えざる根（心）の力によります。心（根）も乾ききらないように、疲れすぎないように、適度の水も、成長

仏様の智慧とは、頭で判断する知恵ではなく、心で感じ取る智慧なのです。それが「慧」（かしこい）という意味で「智慧」となっています。

冒頭の文のように、仏様はあらゆる方便を用いて私達が誠の智慧を身に着けるように、そしてその智慧を備えればどんな困難でも乗り越える力となると云われます。

智慧の「智」とはまた、物事の区別の方を観る力であり、「慧」とは物事の平等の面を観る力です。

沢山の人がいても、皆違います。顔もスタイルも能力も性格も・運命も。人はその区別を認めながらも、人と比較して割り切れない気持ちや、嫉妬やひがみの気持ちを生み出します。

人間は物の違い、人の違いを理解し、区別することは必要なことです。しかしその違った中に平等な大切なものが通じていることを知ること。この区別と平等の両面を包み込んで観ることが智慧でもありと云われます。

智慧は人々への慈悲につながらなければ力を持たず、また慈悲は正しい智慧に基づかなければ方向を見失うと云われます。

日蓮聖人は、「四恩を知って知恩報恩を報ずべし」と述べられています。

- ① 仏様の恩、私達がこの世で受ける四つの恩とは。
 - ② 父母、ご先祖の恩、③ 平和な国土に住んでいる恩、④ 社会であらゆる人や物から受ける恩です。
- 一人では生きていけない。衣食住全てに限りない

するための栄養（肥料）も必要です。それが欠けると、日照り続きの草木のように、身体まで萎れ、心が害されてきます。

辛い時でも心の充電、切り替えをしつかり行い、自らの心の渇きに潤いと安らぎを与えていくことが大切であると云われます。

人生で得た知識を、より良い知恵として磨き、智慧として高めていく時、運勢を好転させる力を導き出せるという事です。

「知識」とは、学校や社会で学んだこと、今まで覚えてきた全ての事柄です。

「知恵」とは、今まで得てきた知識を活用して生かして判断がしやすくなります。頭で考え、損得の判断に偏りがちです。自分の欲に固執し過ぎると浅知恵や悪知恵となります。

「智慧」とは、人間性を高めるもの。物事の本質を見極め、善悪を見抜ける心を養うものです。

「知」とは、ある事柄の一面を知ること。「智」とは、全体を見通す目で物事の本質（神意）を知ることです。従って「知者」とは単に物知りな人。「智者」とは賢者であります。

「慧」とは、「慧（すい）」に心と書きます。慧とは手に箒（ホウキ）を持つ形。夜空を掃くように流れる慧星（すいせい）ほうき星）は、天から地に流れ落ちる星で、それに神仏の心が託されるとされました。

人々のお蔭があります。その恩を知ること（知恩）は漠然とできても、恩に報いる（報恩）生き方を心がけることは容易ではないと云われます。

自分が受けたあらゆる恩を知り、それに少しでも報じていこうと思う感謝の生き方が、その心の波動が、関わり合う人々の心に必ず共鳴してくるのだと説かれています。

お釈迦様の脇侍に普賢菩薩と文殊菩薩という仏様がおられます。

普賢菩薩は白象にまたがり慈悲を教える菩薩です。文殊菩薩は獅子の上に乗る智慧の大切さを表す菩薩です。三人寄れば文殊の智慧のことわざの菩薩です。



何故三人なのか？人は物事を二極対立に考えがちです。意見の違いもそうです。白黒、好き嫌い、損得等・公平な判断には、これらの自分も融え、感情を超えて相反する考えをも融合して共に生かす第三者（三人目）が必要なのです。

本当の自分を知らず第三者（三人目）が必要なのです。つめ直す偏らない真の智慧が必要なのです。仏様の本当の智慧を得るには、自己中心に陥りがちな我欲の心を、先の「慧」のホウキのように絶えず掃き清めて綺麗に祓うことを心がけなさいと云われます。そして何事にも感謝の念を忘れないことが、仏の智慧を授かることになるのだと云われます。

本興寺住職 中谷 聰秀